

大佛次郎自選集 現代小説 第2卷

朝日新聞社

の階段

大佛次郎自選集 現代小説

第二卷 氷の階段

全十卷・第六回配本

一三〇〇円

昭和四十八年三月十日発行

著者 大佛次郎

装幀者 原 弘

発行者 中村 豊

印刷所 明善印刷

製本所 松岳社

製函所 加藤製函

発行所 朝日新聞社

東京 大阪 北九州 名古屋

0393-240136-0042

大佛次郎自選集 現代小説 第二卷

第二卷目次

氷の階段

氷の階段

支那事変に突入した昭和十年代の東京。前の自由主義がおのれから分解を初め、また国から扼殺され初めた時期。物価なども、その時のもので、たとえば千円が昭和四十年代の十万円にも該当する。

手袋

展望車は一番後尾に附いているので動揺が激しくて、通り過ぎて来た線路や山が、露台に出る硝子戸の外に絶間なく傾斜を変えている。車輪の音も直接である。しかし、その響にも馬鹿になった耳に、静かに成ったなと思うと、(英吉はほかの客の忘れた物らしい外国の画報を拡げて眺めていたのだが)視野の中に、前にいる女が身動きして靴下の脚を組み変えたのを感じた。

動くのをやめると、細長く形のいいその脚は、靴の爪先を軽く床に落して垂直に垂れた。靴下の色は少し品が悪いと思われるくらいに濃くて赤く、隠している皮膚の色よりも肉体的な感じを強めているように見える。雑誌の写真から目を上げなかったが、女が脇を向いて、わざと英吉の方を見ていないのが、わかった。かなり前から女は英吉に注意を向けていた。小さい目付や、手袋を脱いだ指の動作に、その心持がこぼれていた。

代議士だと云う縫紋の羽織を着た男が女の話相手になっていた。代議士のような地位にいと、レコード歌手で今売出しの辰巳春江と汽車で乗り合わせた場合に言葉ぐらい掛けて置く用意が要るのかも知れない。声が浪花節のように重々しくて話も上手だった。いや、大層な人気ですね、私の

田舎の町などでもそれなので。いや、一度是非いらしって、歌って頂くんですな。

この一二年で、どんな人間に会っても驚かなく成った春江は、上手に言葉すくなく、代議士の話の聞き役に廻っていたが、そう離れないところにいる青年が非常に静かに自分の方を見まもっているのと、ふと目が合うと、突然に妙に心に動揺を受けた。自分にもその理由が解らなかつたので、ただ変に無遠慮に見ていられたせいかと思つたのだが、心を鎮めるつもりで、稼業柄身についたものに成っている自然で明るい媚びを含んだ目もとを、もう一度向けると、逃げるかと思つた青年の瞳が前よりも大胆に深々と春江を見て待ち受けていて、それが決して親切なものでなかつたので、自分の方が崩れて、視線を逸らしていた。人気がある反面に経験するように成った敵意や嫉妬にも春江は慣れている筈だったが、青年の態度は、それとも違う、もっと極度に人を突放したような冷たいものを含んでいた。何か、あたしが失礼なことでもあつたかしら？ もとより理由もない話で、そう感じさせられたと云うのが不思議なことだが、やがてその青年が大判の外国雑誌を膝にひろげて頁を繰出した横顔を見ると、画家か詩でも書いている人かと思われるくらいに、髪的美しい、幾分か女性的に見えるくらいに子供のように優しい容貌に見えるのだった。まだ、三十にもなっていない若い男である。

「やあ、ほかの土地と違って見る名所もありますが、ただ、食物だけが非常に豊富で美味いんでしてな。」

代議士の話に微笑み返ししながら、春江は急に、この円満で好人物らしい紳士よりも、無言でいる

青年の方が自分の心に近いような心持がして来ているのである。

英吉は、毛皮の外套がいとうの前をひらいて人に贈られた花を膝に置いてある春江を、辰巳春江なんて山車しんしゃのような女だなど思いながら、極く新しいものだった雑誌の写真を丁寧一枚ずつ見ながら、それまでのようには隣となりの会話も耳に入らなくなっていた。流石さすがに欧羅巴ヨーロッパの戦争の写真が多かった。その中に空襲の爆弾の波動を受けて飾窓の硝子が毀れぬように紙や布を貼るのに、流石さすがに仏蘭西フランスのことで美術的な模様を工夫したり、椰子の樹や海に泛んだ汽船の形を切抜いて上手な画にして装飾しているのを、必要に調和させた目新しく美しい仕事として感心して眺めた。別の頁には、外出の時女や子供が持つて出る瓦斯マスクの鞆かべんにも早くも意匠いしょうを凝らした流行が出来ているのを知った。

心が鎮しずまって来て、窓の外に向けていた視線を青年の方へ戻もどして来た時、春江は目が合ったら自分物が溶けるように優しく微笑わらつて見せられると信じていた。何の無理もなく自然に、英吉の頬にも同じ親和の表情を誘い出すことが出来そうに思われたのである。

英吉は、まだ雑誌から顔を起していなかった。春江の瞳が吸い寄せられたのは、窓硝子越しの日の光が暖めている英吉の襟足だった。理髪店の石鹸けんの匂においがまだ匂におっているように、生え際がきれいで皮膚が新しく見えた。向うが無関心でいるので春江は大胆になり充分に英吉の青年らしい美しさを観察することが出来た。それから、ふいと、ああ、そうだ、立つ時に手袋を落して行つて、このひとに拾わせてやろうと明るい気持で計画した。その程度の遊戯は、して見てもいいと思うのだ

った。

（無論、この、きれいな坊ちゃんは何も気がつかずに拾って、私のところへ持って来てくれるわ。）戦線に出て行く仏蘭西軍の七十噸のタンクの写真を見ている振りをしていて、英吉は、外套にくるまった春江の軀からだに隠れている思念の影を捜していて、

（そうなんだ。僕のことを考えているんだ。）

ひろい展望車の中に、ほかに誰も人間がいなくて二人だけにいるから、そう感じたのかも知れなかったが、別に大きな経験をしたことがなくて、小さい時から三人の姉に甘やかされて育って来た間に英吉は女たちの心を皮膚の外側から眺めて、大胆に、こうと決めて了しまう力を作り上げた。たいてい、それが間違わずに的中するのだった。

（何だって、そんなに僕を見るんだ。）

七十噸の重戦車は一抱ひとかかえもあるような巨おおきな立木を、めりめりと踏み碎いて前進するのだった。その頁をまくると、抱かかいていた花束を揺さぶって春江が椅子いすから立ち上って廊下に出て行った。

目を上げて英吉は、踵かかとの高い靴の上に乗った細く揃った足首を見送った。手袋が落ちたのを、春江が持っていた花束の中から何か花が首がもげて落ちたのだと信じた。

黄ろい革の手袋は永く床に残っていた。すぐに春江が探しに引返して来るかと思ったのになかった。手を伸のびして拾ひろって見てから、春江に渡しに行くことを考えている自分を軽蔑した。

「なんだい！ あの女、僕が拾ひろって渡しに行くと思っっているんじゃないか！」

真先に英吉は、硝子窓をあけて、外の風の中へ手袋を投げて捨てることを空想して窓を動かそうとした。靴の音が聞えた。専務車掌が柱の寒暖計を覗きに來たので急いで手袋を掌の中に巻き込んで、その手を上着のポケットに突込んだ。車掌は一度出て行ってから、春江に頼まれて、二度目には手袋を探しに入ってきた。床の上を見廻してから椅子の上を探し、それから椅子を動かして下を覗いて見たが、雑誌をひろげている英吉に尋ねるような無礼なこととはしなかった。

英吉は、春江が自分で見に来るに違いないと思いつながら車掌が大きな背中を向けて出て行くのを見送っていた。——知らないと言え、それっきりなんだ。

小さい時分、姉たちが大切にしている物を、わざと隠して仕舞い、そのまま自分も出すのを忘れて失くして了った記憶もあった。姉たちは三人で、皆、美しくなった順に嫁いで行つた。小さい弟のことに成ると、三人が三人、今でも何を置いても集って来て味方してくれた。姉たちの目には、英吉はその後もう少しも成人せず、英吉の方では軽蔑しているが、いつまでも姉たちの人形に成っているのも自分に都合の好いことが多かった。

いつまでも同じ席にいたが、春江が姿を見せないのも手袋はやはり気がつかずに落したものだつたらうかと、外套や鞆の置いてある自分のコンパートメントへ戻ってきた。手袋は出して見なかったが薄い黄ろい革で、薔薇が萎れた時の色をしていたようである。ここの窓から外に捨てて了うのは簡単だった。手を入れてポケットの中でさぐると、指に触れる感じも柔かった。なんで、ただ

汽車と一緒に乗って向い合わせたと言うだけの女を嫌ったのだろうか？ 浮わついた人気があると云うだけのことだろうか？ その他にもすぐと説明の出来ない動機があるようだが、有名な女だと云うのも確にその一つであった。

馬鹿げたことだし僕の悪い癖なんだ。頭ではそう認めていながら、まだ、どことなく自分の仕事に是認の出来る理由を探しているようだった。五つか六つの時に、誰もいない時を見て、ローラカナリヤを籠から出して弄っている内に、思わず絞殺して了ったことがあった。今でも、その時子供ごころに味わった暗い怖しさを覚えている。カナリヤを籠から出したのは、美しい声の囁りの出る秘密を見たかったせいだが、絞めて見たのは、あまり羽毛が柔かくて優しかったからだだった。死ぬとは知っていた。明らかに殺意があつて、おそれ顛えながらしたことだった。結果を見てから驚いて声を揚げて泣いている英吉のところへ、姉たちが駆け集って来て、皆でまるで競争して慰めてくれて、英吉が何も知らなかったことだと証言した。小さい鳥は自然に死んだのだ。それでなければ、英吉が弄り方を知らなかったので、飛び去ろうとするのを逃すまいと無理に抑えたからだ。

「泣くのはおよしなさい。英ちゃんが悪いんじゃないわ。」

姉たちの親切な努力とは反対に、英吉は、いよいよ激しく泣くのだった。姉たちは慰めてくれるつもりで、死ぬと知っていて殺したのが非常に悪いことだとさまざまに手を変えて教えてくれた。英吉が、なぜこんなに驚いているか全然知らずにいるのだ。どのくらい可怖く思っているかも解らずにいるのだ。嘘ばかり言っていると英吉は思った。自分のしたことが鳥が可愛らしくてたまらな

かったせいだと知っているから、そのことを悪くばかり言う姉たちに強く反抗したい心もあった。悪いことだと頭から言われたから、正直に話すことも出来なくなつたのが、余計もどかしく、反つて消し難い汚染を幼い子供の頭に遺すことに成つたような心持がする。辰巳春江の手袋の為に、なんで、そんな昔のことを思い出すようなことに成るのか？ 手袋の色がカナリヤの羽色に似ていたせいだろうか？

それから英吉は食堂車に行つて見て、春江が来ていて、その前の席が空いているのを見ると、ふいと傾いたように、その椅子に坐つて向い合つて食事をするのを思い立つた。ほかの席を選ぶよりもそこに腰かけなければならんと、彼は思った。

「失礼致します。」

春江は不意打を受けて、

「どうぞ。」

と、答えたが、平然としている英吉の容貌に逆に押し返されたように、急にどぎまぎして赧くなつた。その動悸のせいで、それまで、ひそかに持っていた確信が崩れていた。

（手袋がないなんて、あの車掌が嘘を言ったのかしら？）

給仕に注文を出して了うと、英吉は礼儀正しい裡にも教養のある若い青年らしく優しく春江に話し掛けて来た。

「昼間の汽車は反つて退屈ですね。」

無造作に春江は笑顔を引出されて、

「どこか御旅行のお帰りでいらっしゃいますの？」

「帰省……とでも言うのでしょうか。」

ポケットに入れてある手袋を意識しながら、英吉の笑いは屈託のない明るいものだった。

「学校の休みで家へ帰るのですから。」

「学校と仰有いますと？」

「京都です。」

青年の返事は、簡単で明るかった。

「美術史をやっているんです。」

「ああ。わかりましたわ。」

と、春江は、熱心に、

「御卒業になつて研究室にいらっしゃるか、先生をしておいでなんでしょう。」

給仕が運んで来た料理の皿に羨ましいように健康な食慾を見せていた英吉は、片頬に微笑を流しながら、返事を遅らせた。

「まだ学生なんです。途中で三年ばかり遅れましたから……」

「御病氣？」

「少し、わけがありました。御覽のとおりの大男ですから、病氣はしませんでしたけれど……そう